どうする奈良

超高齢社会を生き抜く

■超高齢社会、高齢者介護を考える編■

第1集

日本の大きな課題となっているのは、超高齢社会化とその影響による経済先行き、医療や介護等社会保障、介護現場の人材不足だ。現在の日本は65歳以上の高齢化率29・1%。核家族化により都市部の単身者高齢化率が上昇。「介護者不在」「老老介護」が懸念される一方、「介護離職」は企業や経済にとって痛手になる。将来への漠然とした不安が横たわる中、超高齢社会の問題と豊かに生き抜くために何をすべきか。専門家や行政、現場の声を交えながらシリーズで紹介する。

■女優

野村 真美 氏

女優の野村真美さんは、実母(87)の介護と特別養護老人ホーム入所に関する様々な経験をされました。辛く孤独なイメージがつきまとう高齢者介護に対し、時折冗談を交えながら明るく笑顔で話す野村さんの話を聞いて介護への負のイメージが変わる思いがしました。

▼これまでの経緯を聞かせてください。

野村 介護には人それぞれのストーリーがあります。家族の環境や経済状態、親に対する思いなど。私は日々、悩みながらも「あきらめない」という気持ちでやってきました。介護される人、私の場合は母の可能性を探りたいという一心で、できる限りのことをしようという思いで取り組んでいます。命にはいつかはお別れの時が来ます。後で後悔しないために愛をこめて思いの限りを尽くすことが母のためになるのではないかと考えました。母は現在、特別養護老人ホームにお世話になっています。入所前、母は絶対に家から離れたくないと言っていました。私は母の思いをできるだけかなえてあげたく、2015年から2018年までの約3年間、実家に住まう母を私と妹で見守りました。母の近くに住む妹やヘルパーさんと協力しやっていたが、私たちだけでは安心して見守ることが難しくなり、ホームに入所することになりました。入所してまず良かったことは食が安定したことです。1日3食、カロリー計算されたバランスの良い食事を摂ることで母は元気になりました。一般的に年を取ると新しい環境に順応しづらくなるが、母は職員さんたちの手厚いケアのおかげですぐに順応できました。

介護に携わる仕事の尊さ伝える
誇りを持って打ち込める仕事に

▼ホームへ入る際に心がけたことはありますか。

野村 私は積極的に職員さんたちに声をかけ会話をするように心がけました。「母をお願いします」という気持ちと共に、職員の皆さんとコミュニケーションを取ることで母の様子がより理解できるようになると考えたからです。また、職員さんも家族が積極的にかかわる姿を見ることでより丁寧に対応してくださると思いました。

現在は週に1度はホームに面会に行っています。私が仕事で地方へ行った時は毎日母にハガキを出し、その日の何気ないことを書いて投函しました。届いたハガキを渡され、それを読むことで母に刺激が与えられ、健康寿命が少しでも長くなるのではないかと考えたからです。娘の押し付けかもしれないがホームでの生活を少しでも前向きに過ごしてもらいたいという思いでやっています。

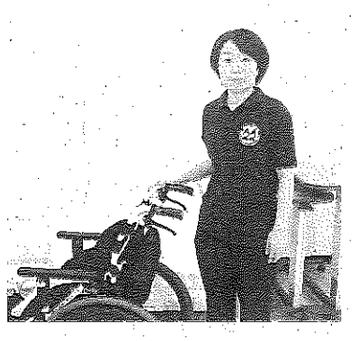
▼ホームにいらっしゃる際に気付いたことはありますか。

野村 私は母だけでなく一緒に入所している周りの人たちともコミュニケーションを取るようにしています。入所者の中には一人で無表情のまましゃがみこむ人や、逆に落ち着かない人など、いろいろな人たちがいます。私はそういう人たちに「初めまして野村真美と言います！お元気ですか！」と声をかけるようにしました。「おばあちゃん昔はさぞかし美人だったでしょう」などと話しかけると、それまで空を見つめていた人がニコッと笑ってくれました。そうやって周りの人たちに話しかけていると、帰る際に「バイバイ！また来るね！」と声をかけると、4人が手を振ってくれようにもなりました。暗い表情だった人の顔がパッと明るくなると私も嬉しくなります。それと、母の入所を通じて「介護やそれに携わる仕事の尊さを広く伝えたい」と考えるようになりました。介護に携わる人たちにもっと誇りを持ってもらうことで心に余裕を持ち仕事にあたることができるのではないかと思います。特に高齢者介護は、長い人生の最終盤を迎えようとしている人に対して尊厳を持ち、サポートするというとても大事な仕事です。しかし、介護士の離職率は高いと聞きます。多くの人が続けられない現状を変えてほしい。そして、多くの人が仕事に打ち込むことができる職業になってもらいたい。私もお手伝いができればと考えています。

▼現在、介護をしている人たちへメッセージを。

野村 一人で無理をしない、抱え込まない。困ったら自治体に助けを求め相談することができると思います。

実家に帰り母の介護に疲れた夜、隣の家からビートルズの「Let It Be」が聴こえてきたことがありました。「あるがままに」でいい。そう、出来る時に、出来ることを。



■奈良佐保短期大学
生活未来科生活福祉コース 准教授

武田 千幸 氏

▼介護福祉士養成教育の現場から

▼現在の介護職員を取り巻く状況は。

武田 超高齢社会になり、介護を必要とする人は増え続けています。しかしその介護を担う人は少ないというのが現実です。実際に特別養護老人ホーム等の介護の現場では、働き手の確保が難しく、特定のフロアやユニットを限るように稼働できないというケースもあります。したがって外国人の介護職スタッフを雇用する、シフトを調整して時間限定シフト、夜間専用シフトを創設し、入りやすいシフトで人材を確保するなどの工夫をしている施設もありますが、人員の確保は難しいと聞きます。

▼介護職に対する社会の二ーズをどのように受け止めておられますか。

武田 介護の仕事は資格や免許がなくても誰でも携わることができます。しかし介護福祉士の資格を持っているということは、介護に必要な法令や身体面に関する知識、介護技術はもちろん専門職としての基礎的知識や考え方を深く学んでいます。たとえば認知症利用者への介護と言っても、単に知識を網羅的に知っていてその場を回すだけではなく、1人ひとりの状況に応じて深く掘り下げ、その人が何を望んでいるのか、なぜそのような行動が起こるのかを把握し、人としての尊厳を守りながら対応していかなければなりません。しかも現場は常に忙しく、そのような中で的確な判断と対応が求められます。これをこなしていくための正確な知識に裏付けられた根拠のある専門的な支援を行う職が介護福祉士です。

介護という仕事の魅力
人としての尊厳を守って

▼学生の資質

▼介護福祉士を目指して学んでくる学生の傾向は。

武田 一般的な傾向として、介護福祉士になりたいと言って高校卒業後すぐに入学してくる学生は少なくなっています。Z世代といわれてデジタル環境に囲まれて育っているという現実もあります。核家族化の中で祖父母の介護という概念が乏しく、リアルなイメージを持つことができていません。高校生の祖父母となるとまだまだ若い方が多く、身近に介護という概念がないのです。

したがって介護福祉士を目指して進学してくる学生は、家族が介護を受けている、あるいは両親や親戚など身近な人が介護の仕事をしているなど、家族が何らかの形で介護に関係している家庭の子どもが多いです。普段から介護の話題が身近にあることでイメージができており、やってみようと思う学生が多いです。

▼しかし介護の現実は厳しいのでは。

武田 そのとおりです。とくに若い世代は全般的にコミュニケーションが苦手です。介護に限らず、相手に対してどのように立ち居振る舞えばいいのか分からないというケースが多いように見受けられます。学生同士で勉強しているうちはいいのですが、実習や実際の介護現場では試行錯誤になります。

▼学科の実際

▼そのような学生に対して、どのようなカリキュラムで臨んでおられますか。

武田 知識と技術を身に着け、専門職として根拠を持って介護の仕事に臨むことができる人材を育成するとともに、プラスαとして得意分野を持って仕事に臨む人材の育成を目標にしています。

具体的に生活福祉コースでは介護福祉士の資格をベースに「地域・防災福祉」「介護予防」「障がい者福祉」の3つのフィールドでさらに学びを深めています。そして3つのフィールドで培った得意分野の知識や実践経験を強みとし、自分の力で課題を解決できる介護福祉士を目指すようにしています。

また提携実習施設との連携を深め、学生が実際の現場で利用者と向き合い、学び、成長できる実習となるような体制づくりに努めています。介護福祉士を支えるのは、利用者の言葉と笑顔です。そこに介護のやりがいを感じられるようにしていきたいと考えています。

また介護福祉士は、単に介護の技術があればいいわけではありません。現実の介護の現場は、さまざまな人によって構成され、運営されています。同職域をはじめ、他職域の人たちをもまとめ、マネジメントしていく能力がこれからの介護福祉士には求められます。その場合、介護福祉士としての根拠に基づいた考えをはっきり言えなければなりません。介護の匠を育てていくことが私の使命だと考えています。